

二〇二〇年度 入学 試験 問題

国 語

注意

- 一、解答用紙には受験番号の記入欄が三か所ある。
三か所とも正確、明瞭に記入すること。
- 二、解答用紙には氏名の記入欄が二か所ある。
正確、明瞭に記入すること。
- 三、解答はすべて解答用紙の所定欄に記入すること。
解答用紙の裏面は使用してはならない。
- 四、文字の不明瞭なもの、判読困難なものは、無効とする。
- 五、問題紙の本文は十三頁ある。試験開始後、落丁・損傷がないか確認すること。
- 六、試験終了後、問題紙は各自持ち帰ること。

— 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

幸福感が高い人たちはどういう人たちなのか。北米で実施されてきた結果に基づけば、より健康で、若く、よい教育を受けていること、外交的な性格で、自己評価が高いことなど、一連の「良い属性を個人が持っていること」が幸福の原動力であることが示されている。内的な原動力をもとに得られる幸福はゆるぎなく、新たなポジティブな要素を呼び込む、いわば「投資材料」ともなりうる。たとえば幸せな人は友人関係の付き合いも広く、新たな良い機会に恵まれる可能性が高いということも知られている。個人が幸福であること自体が一つの価値となりうるのだ。資本主義的な獲得志向の幸福感ともいえるのかもしれない。

一方で日本^Aの幸福感はどうだろう。人生満足尺度を用いて日本で調査を実施すると、概してその数値は他の経済先進国と比較して低くなる。どうやら獲得志向の幸福感がなじまないのだ。様々な調査データから見えてきたのは、人々は「穏やかな幸福」を求めているということである。例えばウキウキしすぎることよりは、安心して静謐に暮らすこと、大成功よりは家庭のささやかな幸せが重んじられる。穏やかさのもう一つの特徴は、「人を傷つけない」ことである。過度に幸せが無い込んでくることはもしかすると他者の妬みを引き出すかもしれない、あるいは自己の成長がとまり、周囲に迷惑がかかるかもしれない。そうすることもはや「幸せ」ではなくなるという考え方である。「穏やかな幸福」は、協調的な幸福ともいえるのであり、他者と分かち合い調和をとることが求められてきた社会における生き方の反映である。

日米での幸福の特徴を比較してみると、拡大成長期には北米モデルが、脱成長社会モデルには日本モデルが、それぞれ適合しているのではないかと思えてくる。資源が拡大していくときには北米モデルで個人の利得を最大化することが、効率よく社会の歯車を回すことになるだろう。

a a もしも新たに獲得できる資源量に限りがあるならば、個人の幸福を最大化するための無理な投資をするよりも、他者と分かち合いながら、b 「ほどほど」の幸せを追いかける徐行運転が社会の持続性を担保するだろう。脱成長期に入った現代社会を考えると、実は日本モデルが果たすことができる役割があるのではないかと思える。

他方、協調的な幸福の地位は今や脅かされているのかもしれない。消費することの快楽や自己の権利意識が強くなれば、今更

「他者と分かち合う穏やかな幸せ」と言われても困るという人もいるだろう。また、個人としては穏やかな幸せを求めているにも関わらず、「社会がそうさせてくれない」という考え方があられるかもしれない。たとえば企業の中における成果主義や競争性はその一つだろう。個人としては出世競争などに関心がないとしても、競争の中での成果という形で自分の働き方の価値が一元的に可視化され、給与などのインセンティブに反映されるとすれば、競争的現実から完全に距離を置くことは難しい。こうして、他者と共生する安定的で穏やかな暮らしを求めながらも、リスクが伴うが快樂的報酬をもたらしてくれる競争ゲームに参加するという状態が発生する。こうして日本においては現在、「個の独立」と「他者との協調」という二つの自己のあり方が存在し、この二つが過度に対立してしまうという理解の枠組みが作られてしまっている。今日の日本社会における幸福を考えるうえでは、協調性という日本社会に存在するモデルの根源的な要素と機能を示したうえで、個の独立の適正な在り方を模索する必要がある。

^B 穏やかな幸福に表れる協調モデルの本質はそもそもどこにあるのだろうか。私たちの研究グループはそのルーツを知りたいと考えた。協調性には和を乱さないことに代表される「他者との協調」、他者からの排除を恐れる「評価懸念」が存在する。他者との協調のためには、他者の考えを理解しようとする態度や、場面や状況において自分が何を求められているのかを理解したうえで行動することなどが必要になる。一方で排除を恐れる評価懸念は、罰回避的な心理傾向である。協調しているからこそ、そして協調を原則とした集団の意思決定がなされているからこそ、内集団から排除されることを「適切に」懸念することが求められる。そのことを避けるために自己の意見を抑制することになる。適切に懸念しない人は、「恐れ知らず」「恥知らず」あるいは「空気が読めない人」と言われるようになる。

ではなぜここまで人々が協調することを重要視し、協調できないことを恐れなければならないのか。一つの答えは社会の流動性の低さにあるとされている。たとえば転職が全くできないという状態を考えてみてもらいたい。自分が入った会社で評価されなければそこでの自分の立場は危うくなる。危うくなったときにほかに行き場がないのだとすれば、社内での立場を安全にしておく方略を取るだろう。日本の社会は引越しの回数、転職の回数、離婚再婚の回数などを見ても、北米に比べると低く、低流動性社会と位置付けることができる。

流動性が低くなるのは農業、中でも比較的規模の大きい水田農業であろう。土地と密接に結びついてなされる農業においては、移動しないことが原則的であり、付き合う相手も地域の隣人たちである。隣人たちも農業を行っている場合、周りのメンバーも変化しない。そうすると、移動の多い業態の人たちが住む地域より「協調的」になると考えられる。もしも協調性のルーツが農業者の移動性の低さにあるとすれば、協調性は「農業者」特有の傾向となるはずである。あるいは農業地域全体として流動性が低いならば、地域特性として協調性が発生している可能性もある。我々のチームはこの疑問にこたえるべく、西日本の400ほどの集落（農業地帯、漁業地帯、その他の地域を含む）をサンプリングし、住民7000人からの調査票への回答を得て分析を実施した。分析の結果、協調性は農業者だけではなく非農業者も含めて、農業地域全体の特性となつてることがわかった。そしてさらに興味深いことに、より協調的な町はどういう町なのかを検討すると、「住民全体の集合活動への参加率が高い町」であることがわかったのである。

水田農業が盛んにおこなわれてきた日本の農業地域では、水の管理が主要な命題となり、人々の協力関係や互いの調整が細かくはかられてきた。また、用水路の整備であるとか、水資源の管理に関わるような清掃活動などには人出が必要であり、非農業者も含めての参加が求められてきたこともあるだろう。そうした業態に直結する活動だけではなく、付随する様々な社会的活動や交流、例えば自治会活動や寄り合い、お祭りの運営と参加、冠婚葬祭での手伝いに至るまで、様々な形での「町の中の協力体制」が組みまれてきた。居住と職場が同一の農業地域では多岐にわたる集合性が成立しているのだ。実際農業地域では漁村やほかの地域と比べて、寄り合い、用水路整備、お祭りなど諸々を含めた集合活動への参加率が高いことがデータでも示された。そして集合活動への参加率の高さが、町全体の協調性の高さを予測していたということは、協調性は農業に従事する人が個別に学習し身に付けてきたものというだけではなく、地域レベルの「文化的制度」として習慣化され、日常の現実として埋め込まれ、あるべき姿（＝何かあれば皆で集まるものだ）として集落で共有される価値となったときに、より強く発動するようになったと見ることができるといえる。

調査から見てきたことは、人が様々な形で集い、互いに役割を調整し合い、ネゴシエーションする過程の中で「他者とうま

く付き合うことを重視する」ということが協調性のルーツとなっていたということだ。人々が集って互いに影響をもたらし合うプロセスが協調性の基盤となつているならば、日本社会において協調性が容易に広まった理由もわかる。顔を合わせて会議をする、同じスペースを共有し互いの進捗や状態を確かめながら情報交換をする。それはまさに日本的な職場環境とも重なる。日本企業においては、「島」あるいは「ライン」と呼ばれる単位での共同作業をする。互いのデスクは向かい合わせの状態にセットされ、直属の上司が部下を見渡すことができるようなオフィスのレイアウトはよく見られる光景である。かつての日本企業に習慣化されていた飲み会や社員旅行、運動会、朝会などの行事も共同作業的なものである。協調性は日本の農村地域を発信源としながら、農村に限らず様々なところに援用されたモデルであり、まさに日本的な心のあり方の基礎となる部分を作ってきたのではないかと推測できる。

日本の心のあり方は今、二階建ての家のようになつていのではないだろうか。一階が協調性なら、二階は独立性である。先ほど述べた協調性が長く根付いてきた一階の基礎部分だとすれば、平屋建てだった日本の心のあり方に、グローバル競争と市場経済で高まった「個人の自由」を重んじる価値体系が入ってきて、二階部分が増設された。一階と二階はバランスよくなければ、建物としてはぐらついてしまう。二階は増築・アレンジも加えやすいし、派手に飾ることもできる。一方で一階はインフラ的な部分であり、誰もが通る場所ではあるものの、地味で目立ちにくい。

公平で自由な競争、あるいはグローバルな価値に対応しているのが独立性だ。独立性とは「個人の自由」と「ユニークさ」を支える仕組みである。様々な意味で自由が制限されていた前近代の時代から比べると、現代にいたるまでに西洋社会の人々は「個人」という概念を飛躍的に発達させてきた。個人の自由とユニークさ（独自性）の追求は、特に北米で最も重要視されてきた価値といえる。しかし日本における独立性は「後付け的」な二階部分であり土台化はされていない。しかし個人の自由も独自性の希求も、いずれも確固たる「個」についての意識についての本質的な理解が伴わなければ難しいのである。西洋、ことに北米社会においては、「個」の意識の獲得は、その宗教観や西洋哲学の思想などの長い歴史を通じて蓄積されている。北米においては、社会の流動性の高さと資本主義という社会環境制度要因とが相互作用して個の意識が強化されてきた。長年かけて西洋社

会で作られてきた理想状態としての「個」のあり方の一部分だけを取り入れようとしたときには、どうしてもひずみが出てしま
う。

日本におけるひずみの一つは一階部分の協調性の基盤の弱体化である。日本の企業において個人の仕事上での権利が保障されるようになり、より公平に人事評価を行い個人への動機づけを高めるものとしての成果主義が定着するにつれ、逆に一階部分にあたる社内の調和は保守的で面倒な古い習慣として排除されるようになった。飲み会を実施しなくなる、あるいは禁止されるようになり、社員旅行も激減した。もしも協調性（懇親や互いの信頼関係を構築する機会）が、公平な競争や自由な意見を述べる独立性を阻んでしまうのであれば、協調性に関連する習慣を削減するべきであるという判断は正しいだろう。私自身も過度な協調性を強いる環境や習慣は、もはや今の時代にはそぐわないと思う。しかし本質的に協調性は独立性を阻むものなのかどうかは再検討も必要である。これらは二律背反の価値と考えられがちであるが、実はそれぞれ別個の概念であり、両立可能性もあるのではないか。

また、むしろ一階部分の弱体化により、互いの信頼関係が欠如することのほうが、二階部分の独立性の障壁となる可能性もある。我々が地域で実施した調査の結果を見ると、地域内での信頼関係が高い町の方が、新しい人たちを受け入れようとする態度を持つなど、より「開かれた」意識を持つ地域となっていた。一見すると町の中での信頼関係は「町の人しか信じない」という排他性をもたらすと考えられがちであるが、そうではない。他者との信頼関係があればこそ、現状への対策を考え、新たな空気を持ち込んでくれる移住者に対してオープンになる。また、信頼関係があれば、誤解をおそれずに互いを公平に評価できるようになるかもしれない。実際企業で収集しているデータにおいても、信頼関係がリスクを恐れずに新しいことを提案する行動につながっていることがわかっていく。

つまり一階部分の協調性を、「 」とした保守的な関係ではなく、互いの信頼関係を構築し、維持するためのシステムとしてリノベートして活用すれば、二階部分の独立性とは両立する可能性があるのではと思える。

そのためには、信頼関係が「縛り」をもたらさないようにすることも重要である。流動性の話を述べたが、たとえば場所を移動

することがなくても、現代においてはネットを通じて私たちは様々な他者と付き合い、新たな考えに接することも可能になった。いくつかの農村地帯などの集落で聞き取り調査を実施してみると、活気のある町では新しいアイデアに接することを積極的に求める気風があると感じる。そしてアイデアに対する反対意見があつたとしても、一度やってみようという実行力を伴つたりリーダーと、それを支える人たちの存在がある。

新たなアイデアや創造性・技術は応用可能性が高く、そのような個人は流動性と新たな機会を求める傾向にあるため、他社との競争の文脈においては高いスキルを持つ人を集団内にとどめようとする力が働く。そして離脱や裏切り、流出を防ぐために一階の協調性を「縛り」として機能させるケースがある。アイデアや技術が個人に完全に帰属するという究極の個人主義と、アイデアと技術は周囲の状況や支援なしには生み出されなかつたはずだから場に帰属するという集団主義は、権利や特許に關連する様々な軋轢を生むことがある。こうしたケースを考えると、どちらが正しいとはなかなか判断できない。

「裏切らない」という行動を美徳的価値と考える傾向は、「どこにでも持ち出せるスキル」を持たない人により強くみられるともいえるのではないか。自分が集団内にとどまる可能性が高ければ、有能な他者が独立性を發揮して成果を己に帰属させ、スキルをよりよく評価してくれる機会を探そうとすることは、損失が高いからである。そのためか、人材競争においてはその人のスキルを競合他社よりも「より高く評価する」ことによつて留める方略よりも、「裏切らないことの美徳」によつて留めようとする傾向が強くと感じる。そのような美徳意識はインフラとしての「信頼」の基盤となるような協調性ではなく、むしろ「人は裏切るかもしれない」「優秀な人ほど裏切るかもしれない」という不信感を核として、集団への契約と依存関係を順守させようとするルールとなつてしまつている。不信感に基づいた関係性を協調性の名のもとに美徳化し、一方で裏切りをもたらしめようとて独立性を批判するならば、一階と二階の対立状態が生じるばかりである。かくして日本社会の持続可能性は低くなる方向へと向かいかねない。

不信感を核として互いを縛るための協調性ではなく、個人が新たな意見を出すことを可能にし、それを受け入れる土壌としての協調性をはぐくむ方策を考えていく必要があるだろう。

(内田由紀子「日本の協調性の行方」)

注 北米で実施されてきた結果 エド・ディーナーに代表される心理学における幸福研究の結果。

インセンティブ 意欲向上や目標達成の刺激となるもの。

ネゴシエーション 交渉・取引。

設問

(一) 空欄 a・bに入る語句として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- 1 かつて
- 2 けつして
- 3 しかし
- 4 どうして
- 5 今更
- 6 あるいは

(二) 空欄「」に入る語句として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 泰然自若
- 2 理路整然
- 3 旧態依然
- 4 曖昧模糊
- 5 面目躍如

(三) 傍線——Aについて、「日本の幸福感」とはどのようなものか。不適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 企業の中で個人の利得を最大化しようとする北米とは違い、他者と共生する安定した暮らしを求めるもの。
- 2 個人の資本主義的な獲得志向が強い北米とは違い、他者を傷つけず、ささやかな幸せを分かち合うもの。
- 3 個人が幸福であること自体が価値を持つ北米とは違い、人を傷つけないように暮らすことを重んじるもの。
- 4 良い属性を個人が持っていることが幸福の原動力になる北米とは違い、安心して静謐に暮らすことを求めるもの。
- 5 成果主義や競争性を求める北米とは違い、穏やかで、他者と分かち合い調和がとれた今日の社会を反映したもの。

(四) 傍線——Bについて、「私たちの研究グループ」が考えた「そのルーツ」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 集合活動への参加率が高いことを示すデータから、流動性の低い農業地域では多岐にわたる集合性が成立していることがわかり、地域全体で人々が集って、互いに影響をもたらし合うプロセスが協調性の基盤となつていけるといえる。

2 農業地域の特性として発生する協調性が流動性の低さを成立させていることがサンプリングでわかり、地域の人々の協力関係や調整が細かくはかられてきたため、集合活動への参加が地域レベルで共有すべき価値となっているといえる。

3 土地と密接に結びついた農業者の移動性の低さを示すデータから、農業地域では農業者特有の傾向として協調性が発生していることがわかり、居住と職場が同一の地域において農業に従事する人同士で協力体制が組みまれてきたといえる。

4 水田農業が盛んにおこなわれてきた地域の集合活動についてのサンプリングによって、農業地域の流動性の低さを予測でき、農業地域特有の協調性を流動性の低さが高めてきたといえる。

5 非農業者も含めた町全体の協調性、集合性の高さを示すデータから、流動性の低い農業地域の人々は、互いに役割を調整しうまく付き合うやり方を身につけるために地域のあるべき姿を個別に学習しているといえる。

(五) 傍線——Cについて、「協調性の基盤の弱体化」の具体例として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 日本の社会では引越しや転職、離婚再婚の回数によって自分の立場が危うくなる。

2 社内の調和が保守的で面倒な習慣として排除され、飲み会がなくなり社員旅行が激減した。

3 個人の仕事上での権利が保障されるようになり、自由な意見を述べる機会がなくなった。

4 新たな空気を持ち込んでくれる移住者が、いつの間にか農業地域をより「開かれた」意識を持つ地域にした。

5 日本のオフィスでの上司が部下を見渡しやすいレイアウトは共同作業に向いており、公平な競争が希求される。

(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

1 集団から排除されることを適切に懸念する人は「空気が読めない人」と言われにくい。

2 お祭りの運営と参加、冠婚葬祭での手伝いをすれば、非農業者は地域のメンバーになることができる。

3 北米社会においては宗教観や西洋哲学の思想によって、個人の自由とユニークさを支える仕組みが「後付け的」に追加された。

4 資本主義と社会環境制度要因との相互作用によって、「個」の意識が強化されてきた。

5 いくつかの農村地帯などの集落で調査すると、実行力を伴ったリーダーと、それを支える人たちが町に活気をもたらしていた。

6 個人のスキルをより高く評価することによって、集団への契約と依存関係を順守させようとする人材競争のルールが生じた。

(七) 傍線——について、「個の独立の適正な在り方」とはどういうことか、説明せよ(句読点とも四十字以内)。

(以上・九十点)

二 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、比叡の山の西塔に貞遠といふ僧ありけり。もと三河の国の人なり。幼くして生国を去りて比叡山に登りて出家して受戒して後、師に随ひて法花經を受け習ひて、昼夜に読誦する間に、皆、空に浮かめおぼえにけり。極めて口早くして、人の一卷を誦する程に、二、三部をぞ誦しける。しかれば、一日、三十、四十部をぞ誦しける。また、真言の秘法を受け習ひて、日ごと法を行ふこと断たず。おほよそ、三業を調へて六根に犯すところなし。

しかる間、長大に成りて後、たちまちに本山を去りて、生国に下りて、先祖の堂のありけるに籠り居て、「静かに後世の勤めを営まむ」と思ひ得て、下りてある間に、要用あるに依りて、馬に乗りて里に出づるほどに、途中にしてその国の国司某といふ人館を出でて行く間に、貞遠に会ひぬ。守、貞遠を見て、馬より下りざることをとがめて、人を以つて貞遠を馬より引き落とさしめて打つ。守、貞遠を召し寄せて恥ぢしめていはく、「汝は誰人ぞ。国の内の貴賤の僧俗、皆国司に随ふべきものなり。しかるに汝何に依りて、我に乗合をして無礼を致せるぞ」と怒りて、貞遠を馬の前に追ひ立てて、館にゐて行きて、すなはち御厩に下して、人を付けて接躑せしむ。貞遠我が果報の拙きことを観じて、心を致して法花經を誦す。

その夜の守の夢に、普賢菩薩の像を白象に乗らしめて、御厩に下して置きたり。その門の前に、また他の普賢菩薩、それも白象に乗りて、光を放ちて奥に向かひて本の普賢の捕らへ戒められ給へることをとぶらひ給ふと見て、夢覚めぬ。守大きに驚き恐れて、夜中に人を呼びて僧をゆるさしめつ。すなはち僧を呼びて、たちまちに淨き畳に据ゑて、守向かひて問ひていはく、「聖人いかなる勤めかまします」と。貞遠答へていはく、「我別の勤めなし。ただ年少の時より法花經をたもちて、昼夜に読誦す」と。守これを聞きていよいよ驚き歎きていはく、「凡夫の身、拙く愚かなるが故に、聖人の徳行を知らずして悩まし煩はし奉りけり。願はくはこの咎をゆるし給へ」といひて、見るところの夢を語る。

その後は、殊に帰依して、館に請じ入れて、日の供を宛て衣服を与へて、丁寧に供養しけり。国の内の人、このことを伝へて聞きて貴び敬ひけり。

しかれば、たとひ重き咎ありといふとも、僧をばあながちに接躑すべからずとなむ語り伝へたとや。

〔今昔物語集〕

注 法花経

三業を調へて六根に犯すところなし

八巻全体を一部と数える。

身・口・意を清潔に保ち、眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの器官において戒を破ることがない。

接躐

乱暴して痛めつけること。

設問

(一) 傍線—— a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a		b	
空に	3 尊敬して	すなはち	3 しばらくして
	2 無心に		2 いいかえれば
	1 天上に		1 すぐに
	4 暗記して		4 ついに
	5 浮遊して		5 そつと

(二) 傍線~~~~~ア「静かに後世の勤めを営まむ」と思ひ得て、下りてある間に」の解釈として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 安らかに先祖の霊を弔おうと思いついて、山からおりている時に
- 2 心澄まして極楽往生のための修行を行おうと思いたつて、故郷に戻って過ごしている時に
- 3 陰ながら将来の人々が穏やかに暮らせるように祈ろうと思いたつて、故郷に戻っている時に
- 4 落ち着いてこれからの仕事を考えようと思いついて、山からおりている時に
- 5 そつと一族の行く末を見守れという思いにこたえて、故郷に戻って過ごしている時に

(三) 次の漢文は、ほぼ同じ内容の説話を載せる『元亨釈書』の一節である。傍線……「しかるに汝何に依りて、我に乗合をして無礼を致せるぞ」と同じ内容の書き下し文として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

遠、雖^二出家、豈^二非^二我^二民^二乎。何^二為^二無^二礼。

- 1 遠、出家なりと雖も、けだし我が民にあらず。何すれぞ礼無き。
- 2 遠、家を出づると雖も、あに我が民にあらず。何ぞ礼を為す無き。
- 3 遠、出家なりと雖も、けだし我が民にあらずや。何すれぞ礼無き。
- 4 遠、出家なりと雖も、あに我が民にあらざらんや。何すれぞ礼無き。
- 5 遠、家を出づると雖も、あに我が民にあらざらんや。何ぞ礼を為す無き。

(四) 傍線……「イ」その門の前に、また他の普賢菩薩、それも白象に乗りて、光を放ちて奥に向かひて本の普賢の捕らへ戒められ給へることをとぶらひ給ふ」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 白い象に乗って現れた普賢菩薩が、馬小屋の中で光を放っている、白い象に乗せた普賢菩薩の像を、入口の外から供養している。
- 2 白い象に乗った普賢菩薩の像がある馬小屋の入口に、別の普賢菩薩と白い象に乗った普賢菩薩が現れ、安否を確かめに來ている。
- 3 馬小屋の中に捕らえられている、白い象に乗せた普賢菩薩の像を、白い象に乗った別の普賢菩薩が入口の外から光を放って見舞っている。
- 4 馬小屋の中に捕らえられていた、白い象に乗せた普賢菩薩の像が、光を放ち馬小屋の入口から逃げようとしている。
- 5 馬小屋に捕らえられている、白い象に乗せた普賢菩薩の像が、白い象に乗った本物の普賢菩薩となって入口に現れ、助け

を呼んでいる。

(五) 傍線——「奉り」と文法的意味・用法が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 消息たびたび聞こえて、迎へに奉れ給へど、御返りだになし。

2 寒さの堪へがたく待るに、その奉りたる御衣、一つ二つおろし申さんと思ひ給ふるなり

3 様々の御修法共始め、御祈り何やかやと、伊勢にも御使ひ奉らせ給へど甲斐なくて

4 かくて、御社にまでつきたまひて、神樂奉りたまふに

5 うたてある心のほどもいとほしきを、思ひわすれたまへとにや、ことにえ見奉りたまはず。

(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

1 三河の国で出家した貞遠は比叡山に登り、受戒して師から真言の秘法を学んだ。

2 幼いときから修行していた貞遠は雄弁家であった。

3 人が法花経二、三部を唱える間に、貞遠は三十、四十部を唱えていた。

4 貞遠が馬に乗って出かけたところ、国司と道で会った。

5 貞遠は前世の行いのせいで不運に見舞われていると考え、心を込めて法花経を唱えた。

6 国司は普賢菩薩の像を館に安置した。

(七) 傍線——について、「丁寧に供養」したのはなぜか、国司の身に起こったことをふまえて説明せよ(句読点とも三十字以内)。

(以上・六十点)